様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ９ 月　 ９ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０４５０

研究課題名（和文）文法化と意味図構築の基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research on grammaticalization and the construction of semantic maps

研究代表者
Ｎａｒｒｏｇ　Ｈｅｉｋｏ（Narrog, Heiko）

東北大学・国際文化研究科・教授

研究者番号：４０３０１９２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、「格」という文法範疇を中心としてを世界の言語における文法形式の多義性に見られる様々な文法的意味機能を二次元的に表そうとする「意味図」を構築し、それに意味変化という通時的な次元を付け加えました。意味変化は、文法化理論の枠組みで取り扱い、意味変化・文法化の方向性も分析した。主な研究の結果として、通言語的な「格」の通時的な意味地図を構築できた。さらに、文法化を伴う意味変化の原則（「発話効力機能への変化」）も提示した。

研究成果の概要（英文）：The goal of this research project was to build semantic maps of specific grammatical categories, especially “case”. Semantic maps two-dimensionally represent semantic and functional similarities that can be extracted from the polysemy of linguistic forms from various languages. We accomplished the goal of building a semantic map of the case area, furthermore accomplishing a second goal, namely to give a diachronic dimension to this map. Our diachronic research was based on the concept of grammaticalization. We furthermore showed that semantic change accompanying grammaticalization always proceeds in the direction of increased speech-act orientation.

研究分野：言語学

キーワード：意味論　格　モダリティ

１．研究開始当初の背景

文法化は、語彙的な範疇から文法的な範疇、そして、文法的な範疇からさらに文法的な範疇への拡張のプロセスをいう。この概念は歴史言語学に古くから存在したが、1980年代から機能主義言語学で再び注目を浴びるようになり、2000年代に入ってから盛んになっていた。なぜこのような伸びを見せたかというと、生成文法で提案されている普遍的な原理に対抗し、共時的な文法構造がその歴史的な成り立ちから説明できると主張したからである。文法化研究が特に最近 10 年の間に多様化し、社会言語学・言語接触など、様々な分野との関わりで研究が行われるようになり、生成文法の枠組みの中でさえ取り扱われるようになったが、現在主流になっているのは、文法化をプロセスとして支える語用論的メカニズムの研究である。

本研究は、再び文法化の普遍的な側面に焦点を当て、文法化における「起源」(source)の範疇と目的(target)の範疇との規則的関係とその表示を追及しようとする。その際には意味図研究が有効と考え、文法化研究と意味図研究を連結させようとするものであった。意味図とは、L. Anderson (1982, 1986)がテンス、アスペクト、エヴィデンシャリティの領域において、言語間に見られる意味的な類似性をとらえるために提案した概念と方法である。２次元的な空間の図の上で、言語間で観察される、意味機能、あるいは文法機能の間の規則的関係を表示するのである。意味図を用いた研究は、Haspelmath (2003)や Croft (2001)などがその理論的な有効性を実証的に示している。特にこの１０年ほどの間に、意味図による言語普遍性の研究は飛躍的な高まりを見せている。

以上のような文法化研究と意味図研究は別々に発達したものであったが、いくつか重大な共通点を持っている。両方とも形式よりも、意味・機能に着目し記述と説明の焦点とする。そして、両方ともそうした意味・機能の間の規則的な拡張関係を想定している。両者で異なる点は、意味図は共時的な関係、文法化は通時的な関係に着目し、意味図は個々の言語形式よりもある意味・機能領域に焦点を当てることにあるが、本研究では、意味図研究をもとにして意味領域全体に着目し、文法化からの観点を借りて意味・機能間の通時的な関係に焦点を当てることによって両者を融合するのであった。

２．研究の目的

本研究は、モダリティと格の領域に焦点を当てるが、二つの領域においても、研究代表者が長年研究を行なってきており、その成果を踏まえて本研究を実施するのであった。

モダリティに関しては、代表者は「意志的―非意志的」と「事態向け―発話向け」の二次元に基づいた意味図を提案してきたが（Narrog 2005, 2007, 2010 など）、そうした意味空間の中で具体的な意味拡張の規則を示すことには未だ至っていなかった。したがって、モダリティ領域で具体的な意味拡張を示す意味図として現在でも参照されるのは、Van der Auwera & Plungian (1998)であるが、彼らの研究はすでに古いデータに基づいている。本研究の目的として、この意味図に代わる意味図を提示しようとした。

格領域に関しては、代表者は研究開始前までの研究（Narrog & Ito 2007, Narrog 2009, 2010 など）において、多くの言語からのデータの分析に基づいて、逆に具体的な意味・機能の拡張と意味のつながりを提示することができている。しかし、ほとんど共時的なデータのみに基づいていたため歴史的(つまり文法化の観点から見た場合)、精度に欠くところがあり、本研究では文法化研究にも適合する地図の構築を目指した。この領域では量的データを多数収集しているので、さらに量的データに基づいた意味図表示を実現することを目的とした。

３．研究の方法

意味図構築および、文法化における意味・機能間の拡張方向性についての仮説をたてるためには、言語データが必要である。本計画では、（１）世界の言語の類型論的データ、（２）日本語のデータに重点を置いた。世界の言語のデータの収集には、既存の記述（文法書、辞書）からのデータ抽出を行った。研究代表者は以前より 200 の言語のサンプルを自分の言語類型論的研究のベースとしてきた。この 200 の言語は、Rijkhoff & Bakker (1998)が開発したサンプリング方法と Grimes (2000)が提示した言語の系統的分類を組み合わせて応用して得た標本である。それらの言語の記述から、本研究課題のために格形式やモダリティ形式の多義性などについての情報を抽出したが、言語の標本と言語の記述を順次に改善した。また、文法化データの分析のためにはさらに歴史的なデータが必要である。歴史的な記述のデータが存在する言語が世界でも限られているが、代表者の専門からして一番解釈可能なのは日本語と印欧語についての歴史的な記述であった。中では、欧米の研究で顧みられることの少ない日本語歴史についてのデータの分析に価値があると考えられた。したがって、本研究では日本語についての歴史的記述も入手し、日本語の文法化データを分析を行った。また、大量の言語からのデータを対象にするため、人為的ミスが起こる。紙資料を対象にする限り、特に研究者がデータを見逃すことがある。それを防ぐ方法として今度の計画では研究補助を

利用し、最初から資料の電子化を行い、電子化された資料に基づいてデータの抽出を行った。
また、意味図構築におけるデータは、量を必要とするため歴史的記述が存在する数少ない言語に絞ることが方法論上問題であり、共時的なデータを併用する必要がある。共時的なデータの分析の際、言語形式の多義性・多機能性の認定が中心となる。多義性が直接記述されている場合もあるが、記述書の著者によっては多義性に注目しないものもあり、分析者が記述の中で探し出して認定する必要が生じる。その場合、上記で書いた資料の電子化がより正確な調査の助けとなった。さらに、共時的なデータにおける多義性・多機能性を認定する際、歴史言語学の方法から借りた「内的再構」も必要となる。つまり、意味・機能間の関係が意味変化・拡張の法則にかなうものかどうかを認証するのである。歴史的な文法化についてのデータの分析に関しては、原則として歴史的な記述をそのまま使用できる場合と、仮説が複数存在するため、その検証を行う必要がある場合がある
以上のように共時的なデータと歴史的なデータを組み合わせて行った分析をもとに意味・機能間の拡張関係を認定し、それに基づいて意味図を構築するのは、質的な意味図構築の方法である。これは本研究の中心の一つであったが、これ以外には近年量的な意味図の構築法が発達しており、本研究では質的な構築法の結果と比較する、あるいはその結果を検証するには有効だと考えたので、以前の科学研究費の研究課題の成果を生かして、量的な意味図の構築も進めた。これに当たって分担者の真田が中心的な役割を果たした。多次元尺度法（MDS）以外にもいくつかの統計的方法をデータに適用した。

４．研究成果
初年度から、精力的にデータの収集を行った。200 の言語の標本を補う良質な文法記述もいくつか得ることができ、また日本語史についての新しい資料・研究も入手できた。また、資料の電子化も進めることができた。データ分析に関しては、まず格助詞を含む日本語の場所関連の文法的標示について研究を進めた。格助詞、取り立て助詞、いわゆる関係名詞（マエ、アト、ウチ、ナカ等）、動詞派生後置詞（ニオイテ、ニサイシテ等）、指示詞の文法化を分析し、朝鮮語のそれと比較した。語源の分かるものについて、身体部位から派生するなど、一定の方向性が認められた。意味変化の全体的方向性に関して通言語的な考察を進めた。その成果を 2013 年の〔図書 5.〕において公表できた。文法化と類型論の相互関係について先行研究に基づいて理論的な考察を行い、文法化が特定な言語の類型（とりわけ、特定な文法的カテゴリーの表現形式）に影響を与えることも、言語の共時的類型が文法化のプロセスに影響を与えることも、両方あることを明らかにして、2014 年 8 月にライプツィッヒのマックス・プランク研究所（〔学会発表 2.〕）、そして２月に日本の国立国語研究所でこのテーマについて発表を行った。日本語の文法化を地域性と言語類型による文法化への影響の中で、その特徴を位置づけようとして、2015 年 7 月に国際シンポジウムを共催して発表も行った。特に形態変化において日本語はいわばほとんど模範的な文法化の一例をなしていることを示した。ところが、その例外も示した。関連して 2016 年 3 月に発行された「外適応」についての論文集（〔図書 1.〕）において、日本語における「外適応」の全体像を示そうとした。日本語における外適応は、主に態（ヴォイス）の文法範疇において起きたことと、音韻的要素の増加という珍しい現象がよく外適応伴うことを示した。ヴォイスという文法範疇における外適応は日本語に限られた現象ではなく、類似した現象がいくつかのほかの言語においてもみられ、ある程度の規則性があることを示した。日本語においてはヴォイス以外にもエヴィデンシャリティー形式「らしい」や接続助詞の「けれど」と「し」に確実に外適応を起き、ほかにも「つ…つ」や「たり」のように、そう解釈できる形式もあることを指摘した。
文法化と意味変化に関しては、日本語を含む複数の言語の歴史的変化のデータに基づいて、初期段階の「主観化」の後に、先行研究で一般に認められている「間主観化」のほかに談話志向的な意味への変化も顕著であることを提案した。2013 年 8 月にオスロで開かれた国際歴史言語学会で発表を行い、二次的文法化、つまり文法化された形式の更なる文法化における意味変化について本研究の成果の一部を取り上げた。通言語的データに基づいて、文法化の後期段階において、格の場合、一時的な文法化に見られる主観化が見られず、格が最終的に時間、因果、契機などの詞的機能と、主格、能格、対象、絶対格、といった極めて抽象性が高い意味機能への変化が見られることを、本研究で得た意味図を用いて示した。これは話し手を間接的に指示する意味や談話中心化の一種と見ることが可能であると論じた。また、他の文法領域も類似した変化を示すことができた。このことについて学会発表のほかに複数の図書や論文（例：下記〔雑誌論文 1., 3.〕、〔図書 6.〕）で公表できた。関連して、2013 年 10 月にアムステルダムでワークショップを開催し、発表も行ったが（下記〔学会発表 3.〕）、文法化の意味的側面と統語論的側面の相関関係が焦点であった。これにおいても、本研究課

題で得られた意味的変化の成果を取り上げ、話し手志向・聞き手志向・談話志向への変化がより上への階層という統語論的変化に相関することを論じた。下記〔図書 4.〕において、当時まで代表者の意味変化論を一冊の本にまとめた。
真田は多次元尺度法（MDS）などによる意味図作成のためのプログラムの改良に取り組み、最初に MDS では思ったような成果を得られなかったのでワード法によるデンドログラムやクラスター分析など複数の統計法を試したが、有力な方法に至らなかった。
モダリティ形式とヴォイス形式の間の文法化関係について 2012 年 9 月に仙台で行われた学会で発表した（下記〔学会発表 5.〕）。
複文の歴史変化と文法化に関して、日本語の中断節の歴史的概観を調べ、東京外語大の国際シンポジウムで発表した（下記〔学会発表 4〕）。語彙と文法の接点において日本語の自他動詞対の研究を再開し、日本語の自他動詞対では本来自動詞ベースの他動詞派生が優勢であることや、不定型への歴史的な傾向が見られることを示し、2012 年（下記〔学会発表 6.〕）と 2013 年にライプツィッヒのマックス・プランク研究所で発表した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）
1. Narrog, Heiko. (Inter)subjectification and its limits in secondary grammaticalization. Language Sciences 47, 2015 年, 148-160. 査読あり
2. Haspelmath, Martin, Andreea Calude, Michael Spagnol, Heiko Narrog & Elif Bamyaci. Coding causal-noncausal verb alternations: A form-frequency correspondence explanation. Journal of Linguistics 50, 2014 年, 587-625. 査読あり
3. Narrog, Heiko. Beyond intersubjectification: Textual uses of modality and mood in subordinate clauses as part of speech-act orientation. English Text Construction 5, 2012 年, 29-52. 査読あり

〔学会発表〕（計 16 件）
1. Narrog, Heiko. Limits of (inter)subjectification in late stages of grammaticalization. Universitat Mainz Department of English and Linguistics - Gastvortrag（招待講演）. 2015 年 08 月 05 日. Mainz (Germany)
2. Narrog, Heiko. Grammaticalization and typology. Guest lecture. Max-Planck Institute for Evolutionary Anthropology Leipzig. 2014 年 08 月 26 日. Leipzig (Germany).
3. Narrog, Heiko. Grammaticalization and semantic change in the area of modality. Workshop “The Grammaticalization of Tense, Aspect, Mood and Modality from a Functional Perspective”（招待講演）2013年10月19日. Amsterdam (Holland).
4. Narrog, Heiko. Insubordination in Japanese Diachronically. Symposium "Dynamics of Insubordination". 2012 年 10 月 27 日. 東京外国語大学.
5. Narrog, Heiko. モダリティとヴォイス. Morphology & Lexicon Forum 2012. 2012 年 9 月 23 日. 東北大学（招待講演）
6. Narrog, Heiko. Japanese transitivity pairs through time. 2012 年 8 月 27 日. Max-Planck Institute for Evolutionary Anthropology Leipzig

〔図書〕（計 21 件）
1. Narrog, Heiko. Exaptation and Language Change. Benjamins. 2016年. Pp. 93-120.
2. Sanada, Haruko. Recent Contributions

to Quantitative Linguistics. Mouton de Gruyter. 2015年. Pp. 139-152
3. Luraghi, Silvia; Heiko Narrog (eds). Perspectives on Semantic Roles. Benjamins. 2014年. 336p.
4. Narrog, Heiko. Modality, Subjectivity, and Semantic Change. A Cross-Linguistic Perspective. Oxford University Press. 2012年. 319pp.
5. Narrog, Heiko. & Rhee, Seongha. Shared Grammaticalization in the Transeurasian Languages. Benjamins. 2013年. Pp. 287-315.
6. Narrog, Heiko. Modality and speech-act orientation. van der Auwera, Johan & Jan Nuyts (eds) Grammaticalization and (Inter-) Subjectification, Royal Flemish Academy of Belgium for Sciences and the Arts. Pp. 21-36

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
Narrog, Heiko
東北大学・国際文化研究科・
准教授
研究者番号：40301923

(2)研究分担者
中本　武志（NAKAMOTO, TAKESHI）
東北大学・国際文化研究科・
准教授
研究者番号： 10292492

小野　尚之（ONO, NAOYUKI）
東北大学・国際文化研究科・
教授
研究者番号： 50214185

(3)連携研究者
真田　治子（SANADA, HARUKO）
立正大学・経済学部・教授
研究者番号：90406611